「あっ♡　ちはるぅ♡　すきっ♡　すきぃっ♡……おっ!?♡♡　ふ、あ〜〜〜〜〜っ♡♡」

（ぐぐ♡　ぐぐ♡　ぐってりゅ〜〜〜〜〜〜♡　っあ〜〜この幸福感♡♡♡♡　たまんない♡）

閉め切ったカーテンの向こうに暗く染まりきった夜空が浮かんでいる。かなめ――この部屋の持ち主だ――は窓際のベッドに仰向けで寝そべり、ひく♡ひく♡とたわわな胸を揺らしていた。かなめの耳に装着されたイヤホンからは男性の声が吐息と共に流れている。若い女性を中心に最近リスナーを増やしてサイト内でも有名になっている男性配信者、千晴の声だ。実際、かなめが今聴いていたのは過去配信のアーカイブだが。

（やっぱりこの回……【密会♡】とあるリスナーとシたかもしれないえっちの話【R18囁きASMR配信】がいっちばん抜けるなぁ……本当のことかもしれないってのがガチ刺さる……千晴、どっちかというとサドっぽいし、あーやっぱ最高♡　推してて良かった♡　今日も生きてて良かった〜♡）

その瞬間、ピンピロリン♪　と通知音が鳴った。かなめが日頃一番優先して見る通知の報せである。

「千晴のファンクラブの通知じゃん、え？　今日配信日じゃなかったよね？　ってことは!?!?」

千晴は時折、ファンクラブ会員向け、それも高額支援者向けに一斉送信メッセージでその日暇なリスナーを探す。場所はいつもバラバラだが、一人誰か相手が決まるとそのメッセージは取り消される。リスナーの間でも有名になっているメッセージだ。いつもどんな条件で選ばれているのか分からないが、メッセージは決まって"急募で悪いんだけど今日暇な人いない？　○○でお茶できるって人メッセージください。"だ。かなめは急いで愛液に塗れた右手をシーツで拭ってファンクラブアプリを開く。まだ消されていない！　しかも場所が新宿！　かなめは個別メッセージ欄を開いて「こんばんは。いつも楽しく聴かせてもらっています。ぜひぜひお茶

行きたいです！　よろしくお願いします。」と送信した。お願いです神様、千晴とお茶行けますように……

数分後、かなめは急いで身支度を整えないといけなくなった。理由は簡単、一斉送信メッセージが消され、かなめのもとに個別メッセージの返信が来たからだ。

「なめこさん、こんばんは。夜なのにメッセージありがとう。ぜひお茶しましょう。先週火曜の配信って見てくれたかな？　見てくれてたら分かると思うんだけど、その配信中に話題に出した喫茶フレーゼに行きたいと思ってて、どうかな？」

勿論返事は"はい"に決まっている。まさかあの有名配信者が自分とお茶だなんて。しかも彼は声を売りにしている。生であの声が聞けるなんてとかなめは誰が見ても分かるくらいに浮かれていた。

邪魔っけな無駄に大きい胸を下着の中に押し込め、手持ちの中で一番の勝負服、清楚系のワ

ンピースを着る。スカート部分がふんわりしていて、かなめの大き目の骨盤をあまり目立たなくするりと見せてくれる。自身の大きい胸とお尻がかなめはコンプレックスだった。一時期、大学生の時分に遊び呆けていた時には異性の気を引くのに丁度いい武器となっていたが、社会に出てからそれはセクハラの対象となり、遊びも控えるようになったころにはそれらは既に邪魔な存在と化していた。

夜という時間もありメイクは気持ち強気な色を乗せる。オフィスメイクより派手な、しかしワンピースに合ったメイクはかなめの気分をより高揚させた。ピンクブラウンメイクは乙女の味方だ。いつもは使わない大粒のラメも黒目の真上に少しだけ足して、かなめは鏡に微笑む。

――二十時、あれからかなめは千晴と複数回に及ぶメッセージのやり取りの末に、千晴が指定した喫茶フレーゼに到着していた。店員に待ち合わせと伝えると、千晴は既に店内にいるらしく、席に案内される。果たして、普段口元しか映さない千晴の素顔は……

（やばガチイケメンじゃん!!!!!　えっ、普段顔出ししないの顔に自信ないからかと思ってたのに……）

そんなかなめの心中はさておき、千晴はかなめに微笑みかける。黒髪を耳上で少し跳ねさせ、優しげな目元をにっこりと湾曲させた千晴は堂々とかなめを呼んだ。

「なめこさん！　こんな夜なのにありがとうございます。千晴です。えーっと、こうしたら分かるかな……？」

そう言っていつもカメラに映っている部分以外を大きな手で隠して口元だけを見せた。

「あ、大丈夫です！　千晴さんかっこいいなって見惚れてただけなので！　あっ挨拶が遅くなってすみません、こんばんは……なめこです。千晴さんとお茶できるなんて夢みたいです。今日はよろしくお願いします」

「あははっ、めっちゃ早口ですね！　かっこいいって、そんな、ありがとうございます。あ、

座ってください」

そうしてかなめは席につき、千晴とメニューを覗き込む。配信で喋っていた通り、千晴は何度かここに来たことがあるらしく、おすすめをいくつか紹介される。

（甘党ってほんとだったんだ……てかやばあ、本人じゃん、声良すぎ～～～～～～♡）

結局、千晴は珈琲とティラミス、かなめはミルクティーと千晴オススメの一品、フルーツタルトを頼むことにした。それにしても、千晴はよく気が付くもので店員を呼ぶタイミング、注文からかなめが退屈しないための雑談まで笑顔でこなす。接待でも受けているかのような気分になってしまう。

（いやいや、実際接待か……私ここ数年でいくらくらい千晴に課金してスパチャ投げてってしてたっけ……）

考えるのも空しくなるので気分を切り替える。たとえ接待であっても千晴が優しく接してく

れるという事実を楽しもう。それからは、軽い雑談からどんな配信が好きとか今までのファンクラブ特典で一番嬉しかったものは何かとかそういったファン目線の意見の話などを楽しんだ。

かなめが千晴の配信の好きなところを挙げ始めた時は千晴は熱心にメモを取りつつ聞き、また雑談の時はいつも配信で見せてくれるコミュ強で軽快なトークを披露してくれた。あっという間に楽しい時間は過ぎ、かなめが時計を見ると二十一時半。

「わ、もうこんな時間か……思ったより時間すぎちゃいましたね、もうそろそろ出ますか？」

千晴が同じく時計を覗き込んで言う。かなめは、正直まだ帰りたくないと思ったが千晴に嫌われることを回避すべく柔和に頷いた。

お手洗いを済ませ、会計をすべく店員に声をかけようとすると、店員から「代金はそちらのお兄様から頂戴しております」と微笑まれた。どこまでもイケメンな所作に驚いていると千晴

は悪戯っぽい笑顔でかなめの耳元に口を寄せた。
「ねね、この後暇？　よかったら……ホテルとか、どう？」
「えっ！　あっ、あ、暇！　暇です！　いっ、行きたいです！　なっなんて……」
対するかなめは突然のお誘いにどぎまぎしている。自然な動作で手を繋がれると、そのドキドキは最高潮に達した。
（え、これって……言い方悪くするとファン喰い……で、でも千晴とデキるなら……）
【密会♡】とあるリスナーとシたかもしれないえっちの話【R18囁きASMR配信】のタイトルが頭を占める。
（多分あれ……ガチだったんだ……え、私なんかが千晴とセックス……え!?）
千晴はホテル街の方へ足を進める。以前は慣れていた場所だったが、如何せんかなめは最近ご無沙汰すぎた。しかしすでに身体は背徳的な行為と甘美なる刺激を期待して疼いている。

（ヤバイヤバイヤバイちょっと、私発情しすぎ……顔赤くない？　大丈夫？）

「なめこさん、顔赤い。可愛い……もしかして、久しぶり？」

それは千晴にまで伝わるほどの熱だったらしく、気にしている事を言い当てられてしまう。流石にはいとは言えなかったが、こくこくと頷いた。千晴は配信で見るような笑みで大丈夫、と言ってくれる。先ほどまで聴いていたアーカイブの中で女性リスナーが横にいる彼に激しく愛されていたことを思い出した。それは、行為としては結構な激しさを伴っていたように思う。

（え……私、ホントにしちゃうの……？）

あの千晴と。有名配信者でありかなめが何万もの大金をつぎ込んできた彼と。己は性行為に及ぼうとしているのだ、と考える頭が身体に準備をするよう命令をする。顔が熱い。頭がくらくらしてまるで酔っているみたいだ。そして、じゅわり、と。下着が濡れた。

――かちゃり。ラブホテルのドアが閉まった。丁寧にドアを開いてかなめを先に入れてくれた千晴は背後からかなめを抱きしめる。ほんのり香るムスクが現実をより一層リアルに感じさせた。千晴の大きな体はかなめの肢体を力強く包む。

（あ……男性の、男性の身体だ……。大きいし、骨ばってる……こんなの、いつぶりだろう）

「なめこさん……」

耳元でひそっと鳴るその音にかなめは身を震わせた。毎晩聴いてはオカズにしていたあの甘く優しい声。意識が遠のいて愛蜜がとろりと溢れる。子宮がきゅん♡と疼いて降りてくる。

（あ……ダメ、立ってられない……）

脚に力が入らない。そのまま崩れ落ちそうになるかなめを千晴は支え、尚耳元で囁く。

「俺の声だけで感じちゃってるの……？　可愛いね……嬉しい」

「ぅあっ、っはぁ、ん、だいじょ、ぶです……」

とても大丈夫には聞こえない声を漏らしつつ必死に大丈夫だと言い張る。声だけで感じているのは事実だったが、手軽な女だとは思われたくない。ただ、千晴の声が好きなだけなのだ。そして、毎晩オカズにしていたせいでその声は淫猥な内容を思い起こさせるというだけで。

「もう敬語取っていいよ。名前も千晴でいい……なんて呼んでほしい？」

（え……）

そんなの、そんなの決まっている。かなめ、だ。まさかこの声が自分の名を読んでくれるなんて。それは、どんなに甘やかでどんなに心地よい響きになるだろう。ネットリテラシーなんかすでに頭にない。推しに、本名で呼ばれたい。その一心でかなめは答えた。

「かなめ……かなめって、呼んで……」

「ん、分かった。かなめ……ベッドまでいける？」

「ん、行く……」

そうはいってもがくがくと震える足に簡単に力など入るわけもない。よろよろと歩こうとするかなめを千晴は抱き上げてベッドに連れていく。けして性急なそぶりなど見せず、柔らかい傾ぎでかなめを押し倒した。

「かなめ……いい名前だね」

愛おしげにかなめを見つめる視線にどこか既視感を覚えた。しかし、押し寄せる怒涛の感情にそれはいともたやすく流されてしまう。

（ちはる……すき、すきぃ……やだ私ってば、っでも、すき……）

「かなめ……キスしていい……？」

千晴はかなめの返事も聞かずに唇を落とした。部屋に、ちゅ、と控えめなリップ音が響く。かなめの腰が浮いた。普段カメラに映すからか、よくケアされている唇は柔らかく、しっとりとかなめの唇を押し包む。強引なのにふわりと浮くようなキス。

（だ、だめ……もういっちゃいそう……きもちい……）

唇を重ね合わせるだけのキスを幾度か繰り返す。そのたびにかなめの腰はへこ♡　へこ♡と動いてしまっていた。

「っふ、かなめ、腰動いてる……かーわい……」

そう言っては千晴はかなめの下腹部を服の上から優しく撫でまわす。ポルチオへ淡い振動が伝わり、そのたびにかなめは嬌声を漏らしてしまう。

（おなかの奥きもちい……まだ入れてないのになんでこんな……）

「んっ……う、あぁ♡……はっ……ふっ、うぁ♡♡」

そうして開いた口の隙から、千晴の舌がぬるりと入り込んできた。微かに甘い唾液を纏ったそれは、音で、動きで、かなめの脳を犯していく。同時に、媚薬のような唾液がかなめの興奮を煽る。音を立てて上顎を舐められると、かなめはびくびくと身体を揺らした。

「キスじょうず……えっちだ」
（きもちいっ♡　うごきもことばもぜんぶきもちい♡　ちはるすきっ♡　だいすきっ♡）
「ふあ……ちはる、すき……♡」
「かなめ……嬉しいな。服、脱ごうか……」
千晴が手早くワンピースの前を開けてしまう。豊満なかなめの胸が露わになった。そのまま下の方までボタンを外すと隠していたヒップがまたも現れてしまう。ぐっしょり湿ったそこを見て千晴はにまりと笑んだ。そのまま乱雑に自分の服を脱ぎ捨てるとかなめと肌を合わせてお互いの体温を確かめる。かなめのブラホックを外そうと背中に手を回すと、かなめが自分で外してしまったらしい。外れている。布と化したブラをそっと横に除けてたっぷりとした胸に頬を寄せた。
「あっ……は、ち、ちはる……むね、おおきいの、いやじゃない……？」

「いやじゃないよ、可愛いと思う」
「っうれし……♡　ね、ちはる……♡　胸、さわってぇ……？」
「ん、いいよ」
そう言って千晴はかなめの胸全体を撫でまわし、しかしけして先の突起には触れずその周りだけを意地悪く指の腹ですり♡すり♡と触る。やわらかく、若々しいハリのある豊かな乳を時に揉み、ときにさすって苛めた。
「っふっ〜〜〜♡♡　っなんでっなんでちくび……やあぁっ♡♡」
千晴はまたもかなめの耳元に唇を寄せて囁く。かなめが大好きな声で、一等むごいことを囁く。
「乳首触ってほしいねぇ……？　一番きもちいいのほしいね……でも、まだあげない……♡」
かなめはふるふると頭を振っていやいやをする。

「っも、もうちょうだいっ♡♡　つらいぃ……っく♡♡ねえぇっ♡♡　ちはるぅっ♡♡　ちょうらいっ♡♡」

涙目になって自ら胸を震わせ、先端を千晴の手に、指に擦れさせようとするがしかし、千晴は巧みな指遣いでそれを叶えさせない。

「うんうん、辛いね♡　辛いの嫌だね♡」

「ほんとにやっ……やなのぉっ……」

本格的に泣き始めたかなめを見て千晴は苛めすぎたかと一瞬反省の色を見せる。そして、いきなり先端を摘まんで耳に息を吹きかけた。かなめの身体がびくびくっと震え、下腹部がきゅん♡　きゅん♡　と疼く。全身で絶頂へと駆け上るかなめは声にならない声を発し、歓喜に呑まれていた。

「あぁあっ♡　そぇっ、それぎもちぃっ♡♡　あぁ〜〜〜〜〜♡♡♡♡」

しかし千晴は先程の反省はどこへやら、乳首を摘まむ指を退けようとはしない。
「ん？　どうしたの？♡」
続けて乳首をこり♡こり♡と苛める。
「いってぅ♡♡　いまいってりゅかりゃっ♡♡」
「うんうん♡　いってるね♡　きもちいね♡♡」
そう言いつつもその手は決して止めることなくかなめの身体を弄ぶ。ふいに顔を寄せて乳首に吸い付いた。ちゅうぅっと吸い上げられかなめは深イキしながら叫ぶ。
「ぁあ！　んおっっ♡　おぉお〜〜〜♡」
そうしてようやく手が止められる。
「ね……かなめばっかり気持ち良くなっててずるいな……俺も気持ち良くしてよ……」
未だイき終わらないかなめから手を離し、バキバキに勃起している自身のつよつよ雄おちん

ぽ様をボクサーから解放した。カリ高ズル剥け勝ち組ちんぽだ。それをイっている最中のかなめの鼻先に近づける。ぜーはーと肩で息をするかなめの鼻から脳へダイレクトに雄臭が届く。この瞬間、かなめはもう千晴に"勝てない"ことを理解していた。

（あ♡♡♡♡　これだめだ♡♡♡♡　ちはるつよすぎっ♡♡　ぜったいわたしじゃかてない♡♡　かとうともおもわない♡♡♡♡）

かなめは全力で雄様に媚びるために舌を出しかけた。それを強い意志でもって制す。

（い……いきなりしゃぶったらふしだらな女だとおもわれないかな……こんな時にも体裁を気にしちゃう……うぅ〜〜〜千晴のちんぽ……なめたいよぉ……♡♡）

千晴はそんなかなめを見透かしたように笑う。

「ふふっ……舐めたいね？　でも……怯えてるのかな？　もしかして、ビッチだと思われたくないとか……？　かわいい、大丈夫、大丈夫だよ♡　だからせめてお手々で気持ち良くし

て？」

かなめはその言葉に縋るように両手で極太ちんぽに触れる。しかし、ちんぽの熱さ、硬さを手のひらで、指先で味わい辛抱たまらなくなって唇を亀頭のさきっちょに押し付けた。

（おっ……♡　千晴のちんぽ、子宮にキくぅ……♡　熱くて、雄臭くて、えっろい匂い……）

むちゅ、ちゅっ♡　はむっ♡　ちゅっちゅっ♡……れろっ♡♡……んちゅっ♡　れろれろぉっ♡♡

かなめは必死で竿を扱きながら亀頭に口づけ、音さえ立てつつ舐める。脳は完全に千晴のおちんぽ中毒だ、千晴のちんぽのことしか考えられなくなっている。亀頭フェラだけで口の中がいっぱいになってしまうほど大きいちんぽ。しかもカリは大きく張っていて、そして力強く雄々しく続く竿はびきびきと筋立っている。まさに今、かなめに興奮しているのだ。かなめを、一晩の相手ながらも自身の虜にさせようと、千晴おちんぽ専用メスまんこ肉オナホにしよ

うと意気込んでいる。そんなちんぽの標的にされて興奮しないはずがない、かなめはいつのまにか片手でちんぽを扱きつつもう片手を自身の下半身に手を伸ばし、いつも千晴の配信でオナニーする時のようにびしょぬれまんこをほじっていた。

「……っ……うん、上手だよかなめ……♡　ははっ、必死でかーわい……♡　まんこまで弄ってんじゃん、こんなに可愛いかなめには、特別なご褒美が必要かな？♡」

そう言って、かなめの耳元で囁く。

「……なあ、俺のちんぽオカズにマンホジすんの、きもち？　そりゃきもちいいよね？♡　だってこんな強い雄様のちんぽ舐めさせてもらってんだもんな？　おら返事しろよ、かなめ……♡」

配信中にもめったに出さないねっとりド低音の、メスを責め立てるボイスだ。いきなりそんな声を、直接耳に流し込まれてかなめは下半身からぷしゃっと情けない音を立てた。同時に体

が跳ねる。イキ潮お漏らしだ。千晴は、かなめをこんな状態に陥れた当の本人であるにもかかわらず、ちんぽをかなめの口の奥に押し込んで更なる高みに導こうとしている。気持ちいいと苦しいが混ざり合ってかなめはもう半分パニックだ。こんなに強い快楽、今まで味わったことがない。本当に、本当に意識が飛びそうで、でも飛ばない、そんなじれったい状態がどれだけ続いたのだろうか。千晴がちんぽをかなめの口から引き抜いた。

「っは、はあっはあっはあっ♡♡♡♡」

ようやく口呼吸が可能になって一息つこうとするかなめを尻目に、千晴はかなめの陰部に口を寄せる。

「せっかくかなめがいっぱい舐めてくれたんだし……ね？」

と、なんとも意地の悪い笑みを浮かべながら。そのままかなめのイキたて敏感おまんこにキスをする。ちゅ、ちゅ、ちゅ、と音を立てて幾度か唇を落とすと、次に分厚く長い舌で下から

上へ、おまんこを舐め上げた。そのままクリトリスに焦点を定め、指で大陰唇を開きながらぺろぺろと舐める。その間にも「可愛いおまんこ」「クリぷりぷりだね♡」などと淫語でかなめを昂らせるのを忘れない。

「あぁっ♡　やあっちはるっ♡　あ、あっ〜〜〜♡♡」

声にならない声で絶頂を繰り返すかなめはもう自分がイっているのかいないのかすらわからない。ただひたすらに全身を震わせ、涙さえ流しながらまんこをびくつかせていた。一度、舌がクリトリスから離れる。終わりを期待したかなめの身体はすぐに絶望した。舌は、今度はおまんこの入口を責め始めたのだ。とろとろにふやけた柔らかい膣肉を舌先でなぶられてそれからずにゅうっと奥まで押し入られる。

「っは、あ〜〜〜〜〜〜♡♡」

もう一度全身でかなめがイくと、またおまんこが収縮する。先ほどより強い勢いでイキ潮が

吹き出た。それは千晴の顔にかかり、千晴は袖で潮を拭き取る。さすがにかなめも気づいたようで、
「あっ……!?　ご、ごめんなさいっ！」
と慌てるも、千晴は
「いや、いいよいいよ。むしろこれだけ感じてくれて嬉しいかな」
と返した。そして、いよいよ、というように枕元のスキンを手に取り、封を開ける。かなめを見やり、優しく笑んで
「もういい？　挿れて」
と言った。
「もっ、もちろん！　あ、でも私ピル飲んでるからゴム着けなくても……」
大丈夫、と言おうとしたが優しく咎められる。

「ピル飲んでても性病とかいろいろあるし、女の子は自分の体を大事にしなきゃダメ。ね？」

（……ずるい、こんなの、本気で好きになっちゃうじゃん。あーあ、配信者として推してただけだったのに……本気で、好きになっちゃうじゃんか）

少し恨めしそうなかなめに気付かないふりをして千晴はスキンをするすると装着する。腹まで持ち上がっている陰茎をかなめのおまんこあたりまで手で力をかけて下ろすと、かなめのぱんぱんに勃起したクリトリスに亀頭でキスをした。